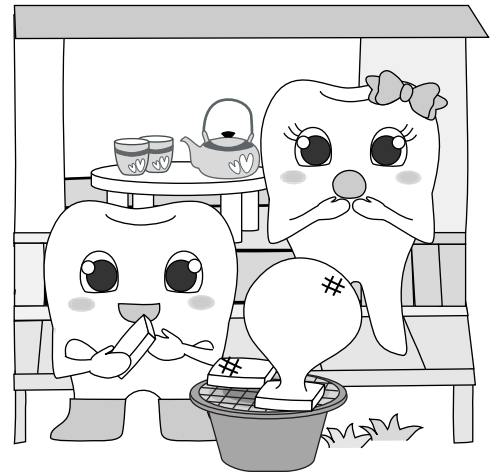


皆さん、こんにちは！いかがお過ごしですか？

津谷歯科医院、院長の津谷良です。

歯が痛む時には、歯に原因があると考えます。しかし歯科医院で検査等を行っても、歯に全く異常が見つからないことがあります。これを「歯が原因ではない歯の痛み」という意味で「非歯原性歯痛(ひしげんせいしつう)」と呼んでいます。この場合、歯が原因ではありませんから、歯科治療を行っても当然痛みは改善しません。むしろ不要な歯の治療を行わないよう注意しなければなりません。非歯原性歯痛には、他の場所に歯の痛みの原因がある「関連痛」というものがあります。

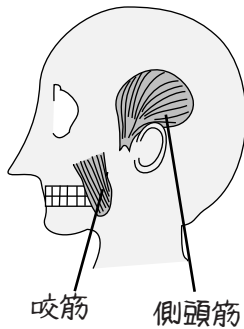
今月は『歯の痛み②』として、関連痛の中でもよくみられる、顔の筋肉と上顎洞炎(じょうがくどうえん=蓄膿症)が原因となるものについてご紹介したいと思います。



関連痛で起こる歯の痛み

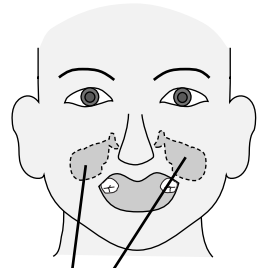
かき氷を食べた時、後頭部やこめかみにキーンという痛みを感じたことがあると思います。このように痛みを感じる場所と痛みの原因となっている場所が異なる場合を関連痛と呼びます。痛みというものは神経が電気の信号を脳に伝えることによって生じるのですが、神経は複雑に枝分かれしたり合流したりしているため、途中で「混線」して脳が勘違いをして関連痛は起こります。歯の場合には、次のような関連痛があります。

① 顔の筋肉・・・食べ物を噛む時に使う咬筋(こうきん)と側頭筋(そくとうきん)が緊張や疲労することがあります。これが原因となって生じる歯の痛みです。非歯原性歯痛の中では、比較的頻度の高いものです。原因となっている筋肉を押し試みて、歯が痛むかを調べます。歯へ麻酔をしても痛みは取れませんが、原因である筋肉のあるポイントへ麻酔するこ



とで、歯の痛みは消失します。治療は、原因となっている筋肉への局所麻酔薬の注射や抗うつ薬などの薬物療法等があります。筋肉を暖めたり、マッサージをする等も有効です。

② 上顎洞炎(蓄膿症)・・・鼻の左右には、上顎洞という空洞があります。上の奥歯の根っこがこの上顎洞の近くにあり、風邪をひいて鼻汁や膿が溜まって上顎洞に炎症を起こすと、およそ2割の人に鈍痛が出ます。この場合は、耳鼻科での治療となります。抗菌剤等を服用して上顎洞の炎症が治れば歯の痛みも消失します。また逆に上の奥歯がむし歯となり、根っこまで感染して上顎洞炎になることがあります。この場合は原因となっているむし歯の根っこの治療を優先します。



上顎洞は奥歯のすぐ上の位置にある

次号では神経障害や頭痛が原因となる歯の痛みや、原因がわからない非定型歯痛等についてご紹介したいと思います。

◆ 歯が痛みの原因でない関連痛では、痛みの原因に対する治療が必要です ◆

口腔ケア新聞の発行にあたって 

ここ数年、外来患者さんやそのご家族から訪問診療のお問い合わせやご依頼を受けるケースがとても増えてきました。小さなご病気されてしまったことがキッカケで、寝たきりになってしまわれたりして、「いつもお元気でいいですね」と話をしていただけなのに・・・そんなことが続いたので、これは本格的に訪問診療に取り組まなければいけないかなって、強く思うようになりました。

そこで取り組みの一環として、要介護者の歯と口に関する情報を地域の介護に携わっている方にお届けしようと考え、口腔ケア新聞を毎月1回発行しています。

津谷歯科医院

診療時間	9:00～12:30/14:00～18:30 (土曜日は16:30まで)
診療科目	歯科 小児歯科
休診日	木曜・日曜・祝祭日
院長	津谷 良
	岡山市中区海吉 1807-14